# 二〇一四年度大学入試センター試験　解説〈古典〉

## 第3問　古文　『源氏物語』「夕霧」

［出　典］

『**源氏物語**』は、**平安時代**中期に成立した**物語**。作者は**紫式部**。出題された「夕霧」は、第三十九帖で、光源氏五十歳の時分を描いている巻。登場している**夕霧**は、**光源氏**の長男（母は源氏の最初の正妻である**葵の上**）。夕霧は、父の教育方針で、大学で学問を修め、まめ人（実直な人物）として成長し、幼なじみである雲居雁と結婚する。今回出題されたのは、そのまめ人であったはずの夕霧が、**柏木**（光源氏の親友で、葵の上の兄である**頭中将**の子）の未亡人である落葉宮という女性に心惹かれ、そのことに腹を立てた雲居雁が実家へ帰ってしまった場面である。近年のセンター試験の古文の問題は、**中世・近世**（**鎌倉～江戸時代**）**の小説類**（**擬古物語・御伽草子・仮名草子など**）からの出題が多く、平安時代成立の物語からの出題は久々のことで、本試では二〇〇〇年の『**宇津保物語**』以来のことである。なお、『源氏物語』は、一九八九年にセンター試験の前身である共通一次試験で「胡蝶」の巻が出題されたことがあり、センター試験になってからは、一九九九年の追試験で「薄雲」の巻、二〇〇三年の追試験で「手習」の巻が出題されているが、センター試験本試験での出題は初めてである。

［通　釈］

三条殿は、「（夫との関係はもう）お終いであるようだ」と、（また）「『（まさか）それほどのこと［＝夫に捨てられるほどのこと］もあるまい』と、一方では（夫を）頼みに思っていたが、『実直な人が心変わりすると跡形もなく（別人のようになる）』と（人から）聞いたのは、本当であったよ」と、夫婦の仲を見届けた感じがして、「何としても夫の無礼なしうちを目にするまい」とお思いになったので、父おとどの邸［＝実家］へ「方違え［＝外出先が凶に当たる場合にまず他所へ泊まってそこから目的地へ行くこと］に行こう」ということにしてお移りになったところ、（姉妹に当たる）女御が実家に（戻って）いらっしゃる折などに対面なさり、少し悩みが晴れることだとお思いになって、いつものように急いでお帰りにもならない。

大将殿もお聞きになって、「やっぱりね、実に短気でいらっしゃる御気性だ。この人の父おとども、また、いかにも大人らしい落ち着いたところが何といってもなく、（父娘ともども）ひどくせっかちで、派手にふるまって事を荒立てなさる人たちであって、『気にくわない、（顔も）見たくない、（声も）聞

きたくもない』などと、きっといろいろとひねくれたことをしでかしなさるだろう」と、思わずはっとなさって、三条殿の（日常住まう）邸にいらっしゃったところ、子どもたちも何人かは残っていらっしゃったので、――（三条殿は）姫君たちと、それから幼い子とを連れて（実家に）いらっしゃったのだった――、（父の姿を）見つけて喜んでまつわりつき、あるいは母上を恋い慕い申し上げて悲しんで泣きなさるのを、（大将殿は）「かわいそうだ」とお思いになる。

（大将殿は三条殿に）手紙を度々差し上げて、迎えに（使いの者を）参上させなさるけれど、（三条殿からは）お返事さえない。「このように頑なで軽はずみな妻であるよ」と、気にくわなく感じなさるけれど、父おとどが見聞きなさるようなこともあるので、日が暮れてから自ら（父おとどの邸へ）参上なさった。「（三条殿は）寝殿にいらっしゃる」ということで、（三条殿が実家で）いつもいらっしゃる部屋には、女房たちだけが控えている。若君たちが乳母と一緒にいらっしゃった。

（大将殿が）「今さら（年甲斐もなく）若者じみた御交際（をすること）ですねえ。このような（幼い）子を、あちらこちらに放って置きなさって、どうして寝殿での御交談など……。（私とは）不釣り合いな御性格とは長年見ていてわかっておりましたけれど、そうなる前世からの宿縁であったのでしょうか、昔から（あなたとは）離れられないと思い申し上げて、今ではこのようにわずらわしいほどまでに子どもが大勢できてしみじみといとおしく思われるので、『お互いに見捨てることができようか（いや、とてもできない）』と（あなたを）頼みに思い申し上げて来たのです。とるにたらないちょっとしたことで、このように振る舞いなさってよいものでしょうか」

と、たいそうたしなめて恨み言を申し上げなさると、

（三条殿は）「何もかも、（あなた様が）『もう（逢いたくない）』と見飽きなさってしまったこの身でございますから、今さら、また、（私の気性が）直るはずでもないので、『どうして（一緒にいられようか）』と思いまして（こちらへ来たのです）。見苦しい子どもたちは、見捨てずにくださるならば嬉しいでしょう」

と申し上げなさった。

（大将殿は）「穏やかな御返事ですねえ。（こうして）言い続けていくと、誰の名折れになるでしょうか（あなたの名折れになるだけですよ）」

とおっしゃって、無理に「（私のもとへ）来てください」とも言わず、その夜は独りでお休みになった。

（大将殿は）「妙に中途半端で身の置き所がないこの頃であるなあ」と思いながら、子どもたちを前に寝かせなさって、あちら［＝落葉宮］でも、また、どれほど思い乱れていらっしゃるかとその様子を思いやり申し上げ、思い悩んで気が安まることもないので、「（一体）どのような人が、このようなこと［＝恋愛］を、おもしろいと感じているのだろう」などと、何となく懲り懲りしてしまいそうに感じなさる。

夜が明けたので、「人が見聞きするようなことにつけても大人げないことなので、（あなたが）『（もう）お終い』と言い切りなさるならば、そのようにし

て［＝離れて暮らして］みましょう。あちら［＝三条殿の邸］にいる子どもたちも、いじらしい様子でお慕い申し上げているようだったが、（あなたがあの子たちを）選び残しなさったのには、『何かわけがあるのだろう』とは思うものの、見捨てがたく思いますから、ともかく必ず何とかいたしましょう」と、脅し申し上げなさると、（三条殿は）「（大将殿は）きっぱりとした御気性であるので、この子どもたち［＝三条殿が実家へ連れてきた子どもたち］までも、知らない所へ連れて行きなさるのではなかろうか」と、心配になる。

（大将殿は）姫君に、「さあ、（こちらへ）おいでなさいな。（あなたに）お会いするためにこのように参上することも体裁が悪いので、そうしょっちゅう参上することもできそうにありません。あちら［＝三条殿の邸］に残っている子どもたちもかわいいので、せめて同じ所でお世話申し上げよう」と申し上げなさる。（姫君が）まだたいそう幼くかわいらしくいらっしゃるのを、（大将殿は）「たいそうしみじみといとおしい」と拝見なさって、「母君の御教えに従いなさってはなりません。本当に情けないことに、（物事の）分別がつかない性質であるのは、とても悪いことなのです」と、（姫君に）言い聞かせ申し上げなさる。

**［解　説］**

**問1　語意の解釈の問題**

重要単語・重要文法を確認し、前後の文意も踏まえて解答したい。

(ア)　**標準**

「いかさまにしてこのなめげさを見じ」の解釈として最も適当なものを選べ。

「いかさまに／し／て／こ／の／なめげさ／を／見／じ」と単語分けされる。「なめげさ」は、「無礼だ・失礼だ」と訳す必修の形容詞「**なめし**」から派生した名詞。「悲しげ」や「悲しさ」が形容詞「悲し」から派生した名詞であることを考えることなどができればわかるだろう。選択肢の中で、これを正しく訳しているのは②と⑤。「いかさまに（いか様に）」は、形容動詞「**いかさまなり**」の連用形で「どのように」の意であるが、類義語の副詞「**いかで**」が**希望や意志を示す表現と呼応**すると「どうにかして～したい・何とかして～しよう」と訳すように、「いかさまに～希望・意志」の状態では同意になる可能性を考えたい。ここでは、「じ」が、打消推量（～しないだろう）・打消意志（～するまい）の助動詞であるから、「どうにかして～するまい」といった意味である。これが正しいのは⑤であるから、正解は⑤。②と迷うが、「じ」との呼応を考えると⑤が正しい。厳密に言うと、②は「すれば」「にすむ」が余計な訳語である。

(イ)　**基礎**

「らうたげに恋ひ聞こゆめりしを」の解釈として最も適当なものを選べ。

「らうたげに／恋ひ／聞こゆ／めり／し／を」と単語分けされる。「らうたげに」は、形容詞「**らうたし**」から派生した形容動詞「**らうたげなり**」の連用形。「らうたし」は「かわいらしい・愛らしい・いとおしい」等の意の必修の形容詞。これについては③・④が正しいことが明らかだが、①・②の「いじらしい・いじらしげに」もほぼ同意で間違っていない。「**聞こゆ**」は、一般動詞として「聞こえる・噂される」、謙譲の本動詞として「申し上げる」、謙譲の補助動詞として「～申し上げる・お～する」と訳すヤ行下二段活用動詞。ここでは、動詞「恋ふ」に付いて使われているので、謙譲の補助動詞である。これが正しく訳されているのは、①と⑤。「聞いていた」としている②・③は誤り。④の「と申し上げていた」は、「聞こゆ」を謙譲の本動詞として扱っており正しくない。よって、「らうたげに」も「聞こゆ」も正しく訳している①が正解。なお、「**めり**」は、「ようだ」と訳す推定の助動詞。「し」は過去の助動詞「**き**」の連体形である。

(ウ)　**基礎**

「いざ、給へかし」の解釈として最も適当なものを選べ。

「いざ、／給へ／かし」と単語分けされる。「**いざ給へ**」は、「さあいらっしゃい」と訳す必修の熟語。「いざ来給へ・いざ行き給へ」の省略された表現である。よって、正解は④。なお、「**かし**」は、「～よ・～ね」等と訳す、念押しの終助詞である。

正解　(ア)　21　⑤　(イ)　22　①　(ウ)　23　④

**問2　文法（「な・れ・て・せ」の識別）の問題　基礎**

波線部**a**～**d**の文法的説明の組合せとして正しいものを選べ。

**a**を含む「なめり」は、断定の助動詞「なり」に推定の助動詞「めり」が接続した「なるめり」の「る」が撥音便化して「**なんめり**」となった状態の「**ん**」**が無表記**となっているもの。「**な（ん）なり・な（ん）めり**」の「**な（ん）**」**のように、撥音便化している助動詞「なり」は断定**なのである。また、**a**の直前の「**限り**」は「限界・極限・終わり・臨終・～（している）内・全部」等の意を表す必修の名詞であるから、選択肢②・④のように**a**を形容動詞の活用語尾と考えることはできない。よって、**a**については①・③・⑤が正しい。

**b**の前後は「驚か／れ／給う」と単語分けされる。「驚か」（カ行四段活用）が未然形であり、「給う」（ハ行四段活用「給ふ」の連用形「給ひ」の語尾がウ音便化した状態）が用言であることから、「れ」は、未然形に接続する**助動詞「る」**の連用形であるとわかる。助動詞「る」は、受身・可能・自発・尊敬の意を表す助動詞だが、ここのように**補助動詞「給ふ」の直前にある場合は絶対に尊敬の意を示すことがなく、受身か自発の意である**ことが多い（可能の意を表すことも多くない）。一方、**「思ひ出づ」のような心情を表す語や、「泣く」のような心情に関わりの深い語に付いている場合は自発の意を示している**ことが多く、ここでも直前の「驚く」は心情語と言えるであろうから、**b**の「れ」は自発を示しており、③～⑤が正解である可能性が高い。ただし、これは**文意に照らして判断しなくてはならない面もある**ので、**b**の意味の判断は保留して、**c**・**d**の意味の判断から正解を導いてもよいだろう。

**c**の前後は「『限り』／と／のたまひはて／ば」と単語分けされる。「のたまひはて」は、タ行下二段活用動詞「宣ひ果つ（のたまひはつ）」の未然形である。よって、**c**は動詞の活用語尾であり、④・⑤が正しい。**「宣ふ（のたまふ）」**は「おっしゃる」の意の尊敬語であるから、「宣ひ果つ」は**「言ひ果つ」**（言い切る・最後まで言う）の尊敬表現である。選択肢①～③が説明している「完了の助動詞」とは、完了の助動詞「つ」の未然形・連用形「て」のことであるが、助動詞「つ」は連用形に接続する。ところが、直前の「～は」はア段の音である。あらゆる活用語の中に連用形末尾がア段の音になる語は存在しない（末尾がア段の音になるのは、四段・ナ変・ラ変動詞、及び、それらと同パターンで活用する助動詞の未然形だけである）。つまり、**c**を完了の助動詞と考えることはできないのである。よって、その面から見ても**c**は④・⑤が正しい。

**d**の前後は「言ひ／知ら／せ／奉り／給ふ」と単語分けされる。「知ら」（ラ行四段活用）が未然形であり、「奉り」が用言であることから、「せ」は、未然形に接続する**助動詞「す」**の連用形であるとわかる。助動詞「す」は、使役・尊敬の意を表す助動詞だが、直前か直後（たいがいは直後）に「給ふ」のような**尊敬語を伴っていない場合は絶対に尊敬を示すことがない**。**d**の「せ」は、尊敬語を伴っていない（直前の「知る」は一般動詞、直後の**「奉る」**は謙譲語）ので、尊敬を示すことはなく、使役であることになる。よって、**d**は①・③・⑤が正しい。

以上のことから、正解は⑤。正確な判断に文意が関わる**b**を保留しておいても、**a**と**c**、もしくは、**c**と**d**がわかれば正解は得られる。

正解　24　⑤

**問3　主体、及び、心情説明の問題　標準**

傍線部**X**「『心苦し』と思す」とあるが、誰が、どのように思っているのか。その説明として最も適当なものを選べ。

まず、「**心苦し**」は、「つらい」「気がかりだ・心配だ」の意も表すが、「気の毒だ・かわいそうだ」の意が問われやすい必修語。よって、「かわいそうだ」と説明している③と、「気の毒だ」と説明している⑤が正解である可能性が高いことになり、大きな意味としては「つらい」の意に含まれるとはいえ、「心苦し」の意味から遠い「愚かなことをした」(①)、「すまないことをした」(②)、「ひどい」(④)は正解とは考えにくいことになる。

一方、第二段落は「大将殿も(三条殿が実家へ戻ったと)聞き給ひて」、「(三条殿やその父おとどが短気でひねくれたことをしでかしかねないと)驚かれ給うて」、「三条殿(の日常の住まい)に**渡り**[=行き]給へれば」、「**君たち**[=子どもたち]も**片へ**[=一部]はとまり給へれば」、訪れた父大将を「見つけて喜び睦れ、あるは**上**[=母上・三条殿]を恋ひ奉りて**愁へ**[=悲しみ]泣き給ふ」ということで、その子どもたちの姿を見た人物が「心苦し」と思っているというのであるから、「心苦し」の**主体は大将殿**である。三条殿は「姫君」や「いと幼き(子たち)」を「**率て**[=連れて]」実家へ帰ってしまっていて、日常の住まいにはいないのである。「姫君たち〜おはしにける」は三条殿の様子を説明する挿入句であるので、文意を把握する際に注意したい。

よって、「誰が」という問いの説明を「大将殿」とし、**第二段落の内容を正しく踏まえて**おり、「心苦し」の意も正しく説明している③が正解。④も主体を「大将殿」としているが、「姉妹や弟をうらやんで」や「我が子の扱いに差をつける三条殿をひどいと思っている」は本文中にこれに相当する表現がない。

正解　25　③

**問4　心情説明の問題　標準**

傍線部Y「もの懲りしぬべうおぼえ給ふ」とあるが、このときの大将殿の心情の説明として最も適当なものを選べ。

傍線部Yは「もの懲り/し(サ変「す」連用形)/**ぬ**(完了・強意の助動詞「ぬ」終止形)/べう(推量の助動詞「**べし**」連用形のウ音便化した状態)/**おぼえ**[=感じる]/**給ふ**(尊敬の補助動詞)」と単語分けされ、「何となく懲り懲りしてしまいそうに感じなさる」などと訳される部分。

注目したいのはその直前の内容である。(注12)によると、大将殿は「落葉宮には疎まれ、妻[=三条殿]には家出されるという、身の置き所のない」状態にある。そして、「やすからぬ心づくし」(気が安まることのない思い悩み)をし、「いかなる人、かうやうなること、をかしうおぼゆらん」(どのような人が、このようなことを、おもしろいと感じているのだろう)と思って、傍線部Yのように感じているのである。「やすから」は「安心だ・安泰だ」の意の形容詞「**安し**」の未然形、「ぬ」は打消の助動詞「**ず**」の連体形、「**心づくし**」は「悩み」の意の名詞、「いかなる」は「どのようである」の意の形容動詞「**いかなり**」の連体形、「をかしう」は「興味深くておもしろい・趣深くて美しい」の意の形容詞「**をかし**」の連用形「をか

しく」がウ音便化している状態、「**おぼゆ**」は「感じる・（自然と）思われる」の意の動詞、「**らん**（**らむ**）」は現在推量の助動詞。つまり、大将殿は恋愛に思い悩み、「一体どこの誰がこのような恋愛をおもしろいと思うのだろう、気が知れない」と思って、「もう恋愛は懲り懲りだ」と感じているのである。よって、この内容を正しく踏まえている②が正解。②にある「落葉宮は落葉宮で傷ついているだろうと想像されて」は、少々解釈が難しい箇所だが、傍線部**Y**の一行前にある「かしこに、また、いかに思し乱るらんさま思ひやり聞こえ」がこれに相当すると考えられる。「**かしこ**」は「あちら」の意で、遠い場所を指す語であるから、これが「落葉宮」を指していると考えればよいのである。

①は、本文全体から感じられる大将殿の思いとしてはさほど間違ったことが書かれているように見えないが、直前の内容を踏まえておらず、特に「どうしてこんな女を良いと思ったのか」に相当する表現が本文のどこと定めがたいので正解にできない。③は、まず「この子を残して」が正しくない。ここはまだ場面が大殿（三条殿の実家）であり、大将殿のそばに寝ているのは三条殿が連れてきた子どもたちである。また、「三条殿の苦悩を思いやって心が痛み」が本文にはない。大将殿は三条殿を苦々しく思っているのであり、思いやっているわけではない。ただし、「自分はつくづく恋愛には向いていない」は、「いかなる人、かうやうなること、をかしうおぼゆらん」から読み取れることとして大きな間違いはない。④は、「不思議と落葉宮と三条殿との間で心が揺れ」が本文にない。（注12）にあるように、大将殿は三条殿にも落葉宮にも距離を置かれているのであり、二人の間でどちらの女性をとろうかと「心が揺れ」ているわけではない。「死にそうな」も本文にはなく大袈裟な表現である。⑤は、「三条殿がいる限り先が見えず」や「三条殿との生活が嫌になり、別れたいと望んでいる」が正しくない。そもそも大将殿は「（三条殿に）消息たびたび聞こえて、迎へに（人を）奉」っているのであり、その返事がないから自ら大殿（三条殿の実家）まで出向いているのである。三条殿と別れたいと望んでいるとは本文のどこにも書かれていない。

正解　26　②

**問5　主体、及び、会話部説明の問題　　応用**

本文中の会話文**A**～**C**に関する説明として最も適当なものを選べ。

**A**は、「かかる人を、ここかしこに落とし置き給ひて、など寝殿の御まじらひは」と言って「恨み」の気持ちを述べている。「**かかる**」は「こういう」、「**かしこ**」は「あちら」、「**など**」は「なぜ」の意であるから、「これらの人達をあちらこちらに落として置いて、なぜ寝殿の交じらいをするのか」といった意味であるが、これは第二～第三段落に書かれている次のことに相当する。つまり、三条殿が姫君や幼い子だけを連れて邸を出、他の子どもたちを邸に置き去りにしており、連れて行った子どもたちも「御達［＝（注11）女房達］」と共に「例の渡り給う方［＝（注10）実家でいつも使って

いる部屋」」に置き去りにして、自分は「寝殿［＝（注9）女御の部屋がある］」で女御と対面して気を晴らしている（本文三行目）ということである。とすれば、この「このような子どもたちを、あちらこちらに放って置きなさって、どうして寝殿での御交談など」という恨み言を言うのは、大将殿である。よって、Aを三条殿の言葉としている③は正しくない。また、②はAを大将殿の言葉としているものの、「子育ての苦労ぐらいで実家に帰る」と説明していることに誤りがある。三条殿が実家に帰ってしまった理由は、本文の前書きにあるように、大将殿が浮気をしたからである。また、大将殿自身は、その理由をAの会話文で「はかなき一ふし［＝とるにたらないちょっとしたこと］」と言っているが、ここでも「子育ての苦労」を持ち出してはいないのである。

BはAに対する三条殿の返事であるから、③はBを大将殿の会話文としている点でも正しくないことになる。また、**話者が自分で自分の動作に尊敬語を使うことはまずない**ので、三条殿が主体であるBの会話文の中で「見飽き給ひ」のように尊敬語が使われているのは、大将殿の動作を表していることになり、②の「（三条殿が）子を育てるのに今は飽き飽きしており」のように尊敬語が付いている動作を三条殿の動作としているのは間違っている。一方、恨み言を言いながらも**三条殿は夫である大将殿の動作に尊敬語を使っている**のであるから、「今、はた、直るべきにもあらぬ」のように尊敬語を使っていない箇所は話者である三条殿本人の動作であることになり、⑤の「あなたのお気持ちがもはやもとに戻るはずもなく」のように尊敬語が付いていない動作を大将殿の動作としているのも間違っていることになる。その点、①と④は「見飽き給ひ」を大将殿の動作、「直るべきにもあらぬ」を三条殿の動作としていて誤りがない。また、「思し棄てずは嬉しうこそはあらめ」も、「**思す**」が尊敬語であり、「嬉しうこそはあらめ」には尊敬語がないので、「大将殿が（子どもたちを）見捨てずにくださるならば、私は嬉しいでしょう」といった意味であると解釈したい。**敬語の使われ方によって主語を判断する**ことで正解に近付くことができるのである。なお、「あやしき人々」が誰であるかを自分で考えるのは難しいが、全ての選択肢で「子どもたち」として説明しているので、そのように理解すればよいだろう。

CはBに対する大将殿の返事。「誰が名か惜しき」は「誰の名（名声・評判）が惜しいか」と直訳される部分で、つまりは、「誰の名声が傷つくか・誰の名折れか」といった意味であるが、これを④は、「私の名誉も考えてほしい」とし、⑤は「あなたの名折れになるだけだ」としている。大将殿は、Aの部分でも柔らかく言いはしているが**ひたすら三条殿を責めていて、自分の立場をわかってほしいといった発言はしておらず、他の箇所でも自分の名誉にこだわっている様子は描かれていない**ので、⑤のように解釈するのが適当であり、④のような解釈は正しくないと考えられる。「言ひもていけば、誰が名か惜しき」は「（こうして）言い続けていくと、誰の名折れになるでしょうか（あなたの名折れになるだけですよ）」ということなのである。ちなみに、「言ひもていけ」の「**もていく**」は「次第に～する・だんだん～する」の意である。

以上のように見ると、選択肢の説明に本文内容との矛盾がない①が正解であることになる。

正解　27　①

**問6　内容説明の問題　標準**

この文章の内容に関する説明として最も適当なものを選べ。

内容合致問題であるから、ひたすら本文と選択肢の内容を照合して判断しなくてはならない。復習の際は通釈で文意を確認しながら照合してほしい。

正解となる④は、「三条殿は、強気に帰宅を拒み」が**B**の会話文に、「思い切りのよい～危惧した」が本文の後ろから四行目「『すがすがしき～』と、あやふし」に、それぞれ相当していて誤りがない。

①は、「おとどと語ることで」が誤り。本文三行目に「女御の里におはするほどなどに対面し」とあり、姉妹である女御と語ることで「少しもの思ひ晴るけどころ」を見つけたことがわかる。

②は、「おとどは、～大将殿に」が誤り。第三段落冒頭の「消息たびたび聞こえて」に主語が書かれていないのは、直前の「『心苦し』と思す」の主体である大将殿が、そのまま第三段落冒頭の主語であるからである。また、直後にある「迎へに」が「実家に帰った三条殿を迎えに」の意であるだろうことも合わせて考えると、「**消息**［＝手紙］」は、大将殿が三条殿に送ったものである。よって、「全く返事をしない」のも、三条殿であって、②が言う「大将殿」ではなく、「かたくなしう軽々しの世や」と嘆いているのも大将殿であって、②が言う「おとど」ではない。ちなみにこの部分にある「世」は「男女の仲・夫婦の仲」の意を表すことがある必修語で、ここでは「夫婦仲である相手」、つまり、「妻［＝三条殿］」のことである。

③は、「すぐさま大殿へ迎えに行った」が誤り。大将殿が、「三条殿の家出を知り、三条殿父娘の短気で派手な性格を考えると、『ひがひがしきこと』をしでかしかねないと驚い」たことは、第二段落にあり、③が言う通りだが、（注6）が付いている箇所に書かれている通り、大将殿はまず三条殿の日常の住まい（大将殿夫妻の邸宅）へ行き、残された子ども達に会い、三条殿に「消息たびたび聞こえ」て、一向に返事がないので、大殿（三条殿の実家）へ行ったのである。

⑤は、まず「三条殿の手もとで育つことになる」が正確ではない。確かに姫君は三条殿が実家へ連れ帰っているのではあるが、大将殿夫妻はまだ離婚すると決まったわけではなく、「三条殿の手もとで育つことになる」という決定も成されてはいない。このまま大将殿夫妻が別れることになれば、そのような可能性もあるといった程度のことでしかない。よって、大将が「姫君の将来を心配して」いることもなく、別れて暮らすことになる姫君に「せめて教訓を言い聞かせることで、父の役割を果たそうとした」わけでもないことになる。本文後ろから五行目に「威し聞こえ給へ」あるように、ここで大将殿は三条殿を威して家に帰ってくるように促そうとしているのであり、最終段落の大将殿の言動も同様のものであると考えるべきである。姫君との別れを惜しんだり、姫君の身を心配しているわけではないのである。

正解　28　④

## 第4問　漢文　陸樹声『陸文定公集』

### [書き下し文]

江南に竹多し。其の人筍を食らふを習ひとす。春の時に方たる毎に、苞甲土より出で、頭角繭栗、率ね以て採食に供す。或いは蒸瀹して以て湯と為し、茹介茶芽以て饋に充つ。事を好む者目するに清嗜を以てし方に長ずるを靳らず。故に園林豊美、複垣重扃にして、主人居嘗愛護すと雖も、其の之を食らふに甘しとするに及ぶや、剪伐して顧みず。独り其の味苦くして食品に入らざる者のみ、筍常に全し。毎に渓谷巌陸の間に当たりて、地に散漫して収められざる者は、必ず苦きに棄てらるる者なり。而るに甘き者は之を取りて或いは其の類を尽くすに至る。然らば甘き者は自ら戕ふに近し。而るに苦き者は棄てらるると雖も、猶ほ剪伐を免るるがごとし。夫れ物類は甘きを尚ぶも、苦き者は全きを得たり。世に貴は取られ賤は棄てられざるは莫し。然れども亦た取らるる者の幸ひならずして、偶棄てらるる者に幸ひなるを知る。豈に荘子の所謂無用を以て用と為す者の比ひなるか。

### [通　釈]

江南地方には竹が多い。（そのため）江南の人々はタケノコを食べるのを習慣としている。毎年春の季節になると、タケノコの身を包む皮が土から顔を出し、（その生えたばかりの子牛の角のような）小さなタケノコの若芽を、みな採って食べる。あるものは蒸したり煮たりしてスープにし、穂先のやわらかいところやお茶を食卓に並べる。ものずきな人は清雅なものへの嗜好をよしとして、大きくなりかかったタケノコは採らない。それゆえ、庭園を美しくしつらえて、幾重にも垣根や門扉を作って、主人がふだんから大事にしていても、食べごろの時期になると、かまわず切り取ってゆく。ただ味が苦くて食べるのに適さないものだけが、タケノコとして（の生を）無事に生きられるのである。ずっと渓谷や山の中で、地面に散らばり広がって生えて、人に採られないものは、必ず苦いものとして見捨てられるものである。しかし、うまいものは取り尽くされてしまうことにもなる。ならば、うまいものは（うまいがゆえに）自らを殺しているようなものである。しかし、苦いものは見捨てられるとはいえ、（それは）切り取られずに（つまり殺されずに）すんだのと同じようなことだ。そもそも、物はうまいものを尊重するが、苦いものは身を全うすることができる。世を見るに、常に、貴くすぐれている者は取り上げられ、賤しく下等な者は捨てて放っておかれる。しかし、必ずしも、取り上げられる者が幸い（なばかり）でなく、捨てられる者が幸いであることもあるのも周知のことだ。これこそ「荘子」の言うところの「無用を以て用を為す」もののたぐいではなかろうか。

［解　説］

**問1　語の意味の問題　(1)　基礎　(2)　基礎**

傍線部(1)「習」・(2)「尚」の意味として最も適当なものを、それぞれ選べ。

**問1**は、昨（二〇一三）年度、久々に「**語の意味と熟語の合致の問題**」が出て、しばらく続くかとも予想されたが、今回は再び、二〇〇九年度から二〇一二年度まで四年連続出題された「**語の意味の問題**」に戻った。二〇〇四年度から二〇〇八年度まで五年続いた「**漢字の読み方の問題**」の形も含め、流動的になってきている。

(1)「**習**」は、「江南に竹多し。其の人筍（たけのこ）を食らふを～」という文脈にあるのであるから、①「学習する」、③「習得する」、⑤「習練する」は明らかにおかしい。つまり、「習（なら）ふ」と読むのではない。②の「弊習としている」は「悪いならわしとしている」という意味になる。タケノコを食べるのが「悪いならわし」というのもおかしいであろうから、意味をあてはめてみて、**正解は④**「習慣としている」になる。「**習（なら）ひとす**」と読むことになる。

(2)「**尚**」は、「尚賢（しょうけん）・尚古（しょうこ）・尚武（しょうぶ）」などの熟語から、動詞として「**たつとぶ（たふとぶ）**」と読み、「尊重する」意があることを知っていたい。「慕う」意や、「誇る」意も、字義としてはなくはないが、「物類は甘（うま）きを～」という文脈からも、「尊重する」とか「よしとする」といった意味と考えたい。**正解は③**。

正解　(1)　29　④　(2)　30　③

**問2　返り点の付け方と読み方（書き下し文）の組合せの問題　標準**

傍線部A「好事者目以清嗜不靳方長」の返り点の付け方とその読み方として最も適当なものを選べ。

「**好事者**」は、すべての選択肢が「事を好む者」で共通している。「好事（こうず）」は「ものずき」なこと。

あとは、「**清嗜（せいし）**」に「清雅（＝清らかでみやびなこと）なものへの嗜好（しこう）（＝このみ）」という（注6）がついている以外、句法上のポイントもほとんどない。

「**目**」は、①・②・③・⑤が「目（もく）す」と読んでいる。「目す」は、「見る」「目をつけて見る・注視する」「目くばせする」「評価する」などの意である。

「**不靳方長**」については、おそらく、「長ずるを靳らず」、つまり、成長して大きくなったタケノコは採らないということを言っていると思われる。「長きに方ぶを靳らず」としている①・④ではないであろう。

あとは、選択肢のように読んだ場合の文意を考えてみるしかない。

②は、「ものずきな人は見て（注視して）それで清雅なものへの嗜好であっても大きくなりかかったタケノコは採らない」。

③は、「ものずきな人は、清雅なものへの嗜好によって、大きくなりかかったタケノコは採らないと見る（評価する）」。

⑤は、「ものずきな人は、清雅なものへの嗜好をよしとして（清雅なものへの嗜好という点から見て）、大きくなりかかったタケノコは採らない」。

②・③は・・・の部分の文意がおかしい。**正解は⑤**であろう。

正解　31　⑤

**問3　空欄補充の問題　応用**

空欄 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ に入る語の組合せとして最も適当なものを選べ。

空欄補充問題は、二〇一一年度以来である。ただ、この四カ所の空欄に、「甘」と「苦」をどう組合せて入れるかは、論理の展開をとらえる問題であって、難度が高い問題ともいえる。

Ⅰ は、「渓谷巌陸（＝山の中）の間」で、「地に散漫して収められざる（＝採られない）」タケノコは、「Ⅰ に棄てらるる」ものだ、という文脈にある。ここは、「苦きに棄てらるる」つまり「苦いとして見捨てられる（放っておかれる）」のか、「甘きに棄てらるる（うまいのに）見捨てられる」のか、迷うところである。厳密には、「於」のはたらきからは、後者のようにとることは無理があるが、受験生レベルでは難しいところであろう。

Ⅱ は、「而るに」という逆接が直前にあるから、Ⅰ とは逆なものが入る。Ⅱ は、「之を取りて或いは其の類を尽くすに至る」、要は、「取り尽くされてしまう」こともあるのであろう。「苦」ければ「取」ったりもしないであろうから、ここは「甘き」者は、としなくてはならない。

Ⅲ は、「然らば（＝それならば）」のあとにあり、「Ⅲ 者は自ら戕ふに近し」とある。この「自ら戕ふ（＝自分で殺している）」は、直前の「其の類を尽くすに至る」を言っている。ということは、Ⅲ も「甘き」が入る。

Ⅰ が不明確でも、Ⅱ・Ⅲ がどちらも「甘」である選択肢は①しかないので、ここで答は出ることになり、Ⅰ は「苦」であることも決定できる。**正解は①**。

Ⅳ は、やはり、逆接の「而るに」が直前にあるので、Ⅲ とは逆に「苦」でなくてはならない。「甘き者は自ら戕ふに近し」であるのとは反対に、

「苦き者は棄てらると雖も、猶ほ剪伐を免るるがごとし（＝苦いものは見捨てられるとはいえ、切り取られることを免れたと同じである）」、つまり、身を全うできるということである。

正解　32　①

**問4　送り仮名のない傍線部の解釈の問題　基礎**

傍線部B「猶レ免二於剪伐一」の解釈として最も適当なものを選べ。

ポイントは、**再読文字「猶（なホ…ごとシ）」**である。

**「猶ほ…（の・が）ごとし」**は、**「あたかも…のようだ」「ちょうど…と同じである」**のような訳し方をする。これに該当しそうなのは、⑤の「切り取られずにすんだのと同じことだ」しかない。

全体としては、「猶ほ剪伐を免るるがごとし」と読む。「剪伐を免る」は、「切り取られるのを免れる」のであるから、④・⑤のように、「切り取られずにすんだ」である。④の「まだ…ない」では、「未だ…ず」でなくてはならない。

「苦い」タケノコは、採られずに、「棄」つまり「見捨てられる。放っておかれる」わけであるが、それは、「切り取られずにすんだ」ということ、生を全うできたということと同じだと言っているのである。

正解　33　⑤

**問5　訓点のない傍線部の書き下し文（読み方）の問題　標準**

傍線部C「世 莫 不 貴 取 賤 棄 也」の書き下し文として最も適当なものを選べ。

ポイントは、**「莫不…」の二重否定**の句法である。

**「莫レ不二…一」**は、**「…（セ）ざるは莫し」**と読まなければならない。よって、答は①か③に絞られる。

①は、「世 莫レ不二貴一レ取 賤レ棄 也」と返り点をつけて、読めなくはない。意味は、「世の中に、取るのを貴び、捨てるのを賤しまないものはない」のようになる。が、ここは、もはやタケノコのことを言っている段落の中ではないので、世に於ける「人間」のこととして考えてみると、この訳し方ではどういうことを言おうとしているのか、よくわからない。

③は、「世 莫レ不二貴 取 賤 棄一也」と返り点がついて、「世の中に、貴なものは取り上げられ、賤なものは捨ておかれないものはない」のような意味になる。ここの「貴・賤」が、単に身分の上下を言っているのかどうかはわかりにくいが、もう少し言葉を補って言えば、「この世の中を見てみると、常に、貴なもの（＝貴いもの・すぐれているもの）は取り上げられ、賤なもの（＝賤しいもの・下等なもの）は捨てて放っておかれる」ということであろう。

「然れども」、しかし、「取らるる者」が「幸ひならず」で、「棄てらるる者」が「幸ひ」なこともある、というように文章は続く。タケノコが、「甘」いがゆえに「剪伐」されて「自ら戕ふ」ことになり、「苦」いがゆえに「棄」てられて「剪伐を免れ」て、生を「全」うできることにもなるのと、人間の運命も同じだということを言いたいのである。

なお、②や④のように、「貴を取る」「賤を棄つ」と読むには、原文の語順が、「取レ貴」「棄レ賤」でなくてはならない。⑤のように読むには、「貴ハ不レ取、賤ハ莫レ棄テラルルコト」のような語順でなくてはならない。

正解　34　③

**問6　段落の分け方の判断の問題　応用**

本文を論旨の展開上、三つの部分に分けるならば、㋐～㋔のどこで切れるか。最も適当なものを選べ。

段落に関する問題は、二〇〇九年度以来、久々の出題である。

**正解は①**である。

**第一段落**（㋐まで）「江南に竹多し。～茹介茶荈以て饋に充つ。」は、江南地方には竹が多く、人々は筍を食べる習慣があり、春になるといろいろな食べ方で食卓に並べるという話で、第二段落でタケノコの「甘・苦」についての話をするために、まずはタケノコのことを持ってきた導入部になっている。

**第二段落**（㋓まで）「事を好む者～猶ほ剪伐を免るるがごとし。」は、タケノコは「甘」いものは採られるが、「苦」いものは棄ておかれることを述べ、ここで、「甘」いものは「取」られて、あるいは「剪伐」されて「自ら戕ふ」が、「苦」いものは「棄」てられて「剪伐を免れ」、生を全うできると、第三段落の「趣旨」へ続けるための、タケノコによる比喩での論理の展開部となっている。

**第三段落**は、「夫れ（＝そもそも）物類は～」と、ここからは、単にタケノコの話でなくなっている。

タケノコが、「甘」いがゆえに「剪伐」されて「自ら戕ふ」という、タケノコ自身の「生」としては「不幸」なことになることもあり、「苦」いがゆ

えに「棄」てられて「剪伐を免れ」、タケノコとしての「生」を全うできる「幸」を得ることもあるのと同じように、人間も、「貴」であるがゆえに「取られ」るが「幸ひならず」という運命をたどることもあり、「賤」であるために「棄」てられたことが「幸ひ」になることもあると、人間の人生の禍福についての論になっているのである。

正解　35　①

**問7　傍線部の読み方・解釈と、本文全体の筆者の主張の説明問題　標準**

傍線部D「豈 荘 子 所 謂 以 無 用 為 用 者 比 耶」の読み方と筆者の主張の説明として最も適当なものを選べ。

設問・選択肢の複雑さを見ると、一見たいへん面倒な問題に見える。もちろん、選択肢のように読めるのか、そのように読んだ場合の意味は正しいのかも考えなくてはならないが、最も重要なのは、これが「**筆者の主張**」＝「**本文全体の趣旨**」を問う、まとめの設問だという点である。つまり、判断すべきなのは、各選択肢の後半である。

ここまでの各問いを解きながら説明してきたように、筆者が、第二段落のタケノコの比喩を通して言いたかったことは、「甘」いからタケノコは「取」られて食べられるのであるが、タケノコそのものの「生」という点からすれば、「苦」いからこそ「取」られたりせず「棄」ておかれて天寿を全うできるという見方もできるということである。人間も同じではないか…と、第三段落では述べられている。この点を説明している**正解は⑤**である。

①は、「無用のはたらきかけを戒める『荘子』の考え方」が間違いである。

②は、「役に立たないことを自覚してこそ世間の役に立つという『荘子』の考え方を体現」が間違いである。

③は、「無用のものを摂取しないことが天寿をまっとうする秘訣だという『荘子』の考え方に反論」が間違いである。

④は、「無用のようにみえるものこそ役に立つという『荘子』の考え方」は正しいが、「…が見失われがちなことを嘆いている」が間違いである。

**荘子**（『荘子』であれば書名）は、**老子**と並ぶ「**道家**」の代表的思想家である。「**無用の用**」は⑤の訓読にあるように、「無用を以て用と為す」ということであるが、一般には、④の選択肢のように、「**無用のようにみえるものこそ（が実は）役に立っている**のだ、という考え方である。

たとえば、家屋や器を思い浮かべるとき、我々は建てられている家の形（外観）、茶碗なら茶碗の形を考え、それを人が住み、用いる、「有用」な家や器だと思っているわけであるが、しかし、よく考えてみると、家の家としてのはたらき、茶碗の茶碗としてのはたらきは、「無用」に見える、中の空間にこそある。もちろん、外枠になる「形」ある部分がなければ、内側の空間もそもそもないことになってしまうのであるから、屁理屈と言えばそうであるが、ものの見方、考え方としては「なるほど」とも言えるであろう。

⑤の選択肢の、「**無用とされるものこそ天寿をまっとうするのだ**」についても、『荘子』にこんな例がある。

荘子が弟子をつれて山の中を歩いていたとき、立派な大樹があった。ところが、そばにいた木樵(きこ)りはその大樹を切ろうとしなかった。立派な大木なのであるが、幹や枝が曲がり、節(ふし)もあったりで、木材にはできないのだと、木樵りは言う。荘子は弟子たちに、この大樹は「無用」なるがゆえに切られることなく天寿を全うできているのだと言った。

「苦」いタケノコの話は、まさにこの後者の例と同じことである。

傍線部のアタマに「**豈**」があり、文末の「耶」と呼応して、ふつうには反語形の「豈(あ)に…んや」となるべきであるので、①・④に着目してしまったという人もいるかもしれない。この点では少々意地悪な質問だったと言うべきであるが、最後の「趣旨（主旨）」説明問題は、とにかく、本文との内容合致問題なのである。

正解　36　⑤